様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　21　年　6月　1　日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2006～2008
課題番号：１８５２０５２０
研究課題名（和文）　近世における産業・流通・金融の相互関連性と環伊勢湾地域社会の特質
研究課題名（英文）　Research of relation industry , distribution and finance in Ise bay area in Edo period

研究代表者
曲田浩和（MAGARIDA　HIROKAZU）
日本福祉大学経済学部准教授　曲田浩和
研究者番号：００３２９７６５

研究成果の概要：近世の伊勢湾地域は、巨大市場・江戸を販路としたさまざまな生活物資を生み出し、供給している。本研究で取り扱うのは、木綿業と醸造業である。その産業システムは、一村でつくられるのではなく、伊勢湾地域を背景に形成される大掛かりなものである。さらに、産業に伴う、流通・金融の展開に注目する。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００６年度	1,200,000	0	1,200,000
２００７年度	1,000,000	300,000	1,300,000
２００８年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	2,700,000	450,000	3,150,000

研究分野：日本近世史
科研費の分科・細目：史学・日本史
キーワード：木綿業・醸造業・江戸市場・廻船・為替・領主

１．研究開始当初の背景

(1)　近世の産業史研究は、19 世紀以降に重きが置かれており、18 世紀の研究が少ない。しかし、産業史は、18 世紀の農村荒廃の状況からの社会構造からの転換や、領主の産業育成政策のなかで考える必要がある。

(2) 地域経済圏研究は、大塚久雄氏の「局地的市場圏」を中心に進められている。しかし、生産に限定されたものであることに、問題がある。近年では原直史氏が、流通の断面を詳細に検討することにより、社会集団のあり方や地域社会との関係を明らかにし、地域市場論を提起した。こうした研究を基礎に消費を踏まえ考える必要があろう。近年では繊維産業として田村均氏の研究があるが、生産地研究を基盤としたものではない。そこで、江戸市場をターゲットとした、生産地研究を行う。

(3) 近世社会において産業・流通・金融が個別に進められており、それらの相互関連性を捉える研究が少ない。そこで、縦軸は領主から村への支配の関係と、横軸は地域経済圏として捉える。

領主の藩の経済統制については、古くから藩専売制の研究があり、また、維新変革との関わりにおいて経済的集中の観点から研究が進められてきた。近年では、藩の農村経済政策のなかで産業の位置づけ直

す、山形万里子氏の研究がある。佐賀藩の均田制と専売品である陶器生産の問題を扱っている。西向宏介氏は、播摂の木綿生産について大坂市場を意識した地域産業として捉え、地域市場の形成と全国市場との関連で捉えている。

村落内での産業史研究では、六本木健志は縮生産地帯である越後を対象として、特産物地帯の特質を描いている。また、平野哲也氏は北関東農村を対象に村落の存立として産業の重要性を説いている。

領主側・村側の側面で、それぞれの立場による研究を進められており、前者では村内部の問題が、後者では領主支配の問題が捨象されている。

そこで、領主支配・村内部の両側面を考えるなかで、産業史研究を捉え直す必要性を感じた。

２．研究の目的

(1) 18 世紀から 19 世紀にかけての産業システムの形成を、領国論・非領国論で捉えるのではなく、非領国・領国の枠組みを越えた伊勢・尾張・三河の地域市場の展開のなかで考える。

非領国の経済地域の設定については、大阪周辺地域を扱った安岡重明氏以来、数多くの研究がみられる。それに対し、領国論は、岡山藩研究会の「藩世界」、尾張藩社会研究会の「藩社会」、渡辺尚志氏の「藩地域」、などそれぞれ研究が進化している。ここで取り扱うのは、藩を中心としつつも、それを越えた地域が重要な意味を持つと考えた。環伊勢湾地域の産業は、江戸市場をターゲットに成立しており、ひとつの経済地域を形成しているといえる。

(2) 産業システムの形成にともなう地域社会の変容を考える。一つは、生産地ができることによって、その周辺地域が役割を担う点に注目する。二つめは、生産地となる村の変容を考える。

ひとつめは、ここで考える村の産業とは、個人の都合で行う産業をイメージするわけではない。たとえば、半田村の酒造業は、２万石の酒造米を使用して酒造業が展開している。経営体は個人であっても、約 25 家の酒造家が集住している。また、このような村が知多半島に複数存在している。知多半島全体で酒造米高は、時期によっても異なるが、約 9 万石に及ぶ。

大規模な酒造地帯を支えるには、原材料の確保、製品の販路、桶・樽などの周辺道具、精米やそれにともなう労働力が不可欠である。その点に注目し、産業・流通の相互関連性および、地域市場、領主の役割といった観点から、複合的に捉える。

二つめは、一つめの産業システムの構築によってつくられた醸造業主体の村が、どのように変容したかを考える。村内部の階層分化の問題と、産業によって蓄えられた富（地域経済力）の消費のあり方を問題とする。

３．研究の方法

(1) 商家の経営文書を中心に、領主側の商人把握（株仲間）、統制（触留）を組み合わせることにより、地域における産業の全体像を捉える

(2) 産業を支える廻船・商人の史料から、産業・流通・金融の関係性を考える。大別すると、生産に直接かかわる商人、物流の担い手である船、江戸での代金決済にかかわる為替を扱う商人の三つである。

(3) 村にとっての産業を村方文書をから考える。産業による村社会の変容を捉える糸口となる。

４．研究成果

(1) 18 世紀後半の知多半島の酒造業は、特定地域に集中し、その地域内外の力によって、生産システムの形成がみられた。とくに、原材料としての米の確保、江戸積廻船の役割などが指摘できる。

生産システムの形成は、尾張藩の力によるところも大きい。18 世紀後半に、産業育成政策を実施したことにより、木綿業・酒造業・廻船業の発展につながった。知多半島のなかには農業生産力が低いところもあり、諸稼ぎに頼らざるを得ない地域もある。とくに、知多半島西浦では、農村荒廃による困窮農民を助けるため、村の富裕層が資金を提供し、酒造業をはじめる場合もあった。

さらに、年貢米を酒造米に転用できる払居米制度により、酒造米確保につながった。また、取船免状による尾州廻船の保護は、自由な廻船活動の保証となった。

紀州藩は、尾張藩に比べ、産業育成政策をほとんど行わない。江戸に伊勢屋が多いように近世初期から商業活動がさかんな地域である。紀州藩は、産業育成政策を行わなくても、上納金や調達金を獲得することができる。その点は、尾張藩との大きな違いである。

(2) 木綿業では、江戸木綿問屋の流通規制が厳しく、尾張の木綿買次問屋株の統制も行っている。知多白木綿の品質が向上するなかで、消費地である江戸における知多白木綿の位置に変化みられるようになった。

18 世紀中頃の知多白木綿は、下等品とし

て扱われており、商品によっては最後の加工部分を伊勢で行われることもあった。18世紀後半になると、技術の伝播があり、知多白木綿の品質が若干良くなる。それでも、最上等の商品はつくることはできなかった。高品質の知多白木綿生産は、天保期以降であった。しかし、必ずしも、市場は高級品を求められるのではなく、価格に応じた品質の白木綿のニーズが高まり、知多白木綿ブランドが成立した。

(3)酒造業では、18世紀後半の尾張藩の産業保護政策により、知多酒造業が展開した。知多酒造業は、江戸への販路を拡大する以前、三河刈谷を販路としており、ブランドとしての価値を高めた。

刈谷市場における知多酒は、他酒と比べ価格が高いことが明らかである。18世紀後半は、江戸で消費社会が一定度展開する時期にあたり、知多酒の需要も大きく見込めたのである。

19世紀前半、江戸での酒は供給過多となり、その影響を大きく受けたのが知多酒であった、それは、灘・伊丹などの上方酒に比べ、品質が劣っていたためである。江戸での知多酒価格の暴落につながり、廃業・転業する知多酒造家もあらわれた。

しかし、酒造業の衰退は、新しい醸造業をもたらすこととなった。半田村の酢や、大浜村の味醂などである。酒造業の道具をそのまま転用できる点にメリットがあった。とくに酢は、酒粕を原料としたため、酒造地帯で展開するには都合が良かった。また、酢造家は、原料となる酒粕を手に入れるため、酒造家に対し、前貸金を渡した。それが、とくに中小酒造家の多い三河にとって、前貸金は酒造家の運転資金となった。酒造地帯からの醸造業地帯への転換は、地域経済の活性化につながった。

また、幕末になると、江戸下り酒のなかでの尾張産酒（ほとんどが知多酒）の占有率が、16%まで向上する。一方では、三河酒が１%未満となった。三河酒造業の衰退にともない、知多酒造業の原料米が三河から流れるようになった。尾張米を中心とした酒造りの転換がみられるようになる。

(3)　産業の発展により、村落内における階層分化が進み、産業で蓄えた経済力が村財政を支える構造を生み出していった。このような経済力を持つ富裕層が、村役人を勤めざるを得ない状況となった。半田村では、文政から幕末期にかけ、年貢未進銀が3000両を超え、村役人が肩代わりする状況が恒常的となった。

また、天保期には頭百姓が交代で勤める体制が築かれた。安政期の下半田村では、16人の頭百姓が存在した。この頭百姓のほとんどが酒造家であり、半田村の酒造業との関連が指摘できる。

さらに、頭百姓による村政が行われ、村政に関わるさまざまな問題を、頭百姓による入札制を実施し、決定している、村会所の場所、湯屋の開設、定使の採用などである。村政運営は村人の総意に基づくイメージがあるが、そうではない事例のひとつが提示できた。ただし、湯屋の開設については、村人29名の署名が出されており、入札の判断の対象にもなっている。署名は、村人の頭百姓への働きかけにもなっており、必ずしも頭百姓だけで村政を行っていない点は注目すべきである。

(4)　天保12年の株仲間解散令により、酒・木綿ともに、江戸問屋の支配力は弱まったことで、尾張藩が国産品統制を強化した。数万両に及ぶ上納金の賦課は、知多の酒造家や木綿商人を経済的に圧迫した。そこで、知多の商人たちは、三河との関係を重視することにより、尾張藩との距離をとった。

とくに、尾張と三河の両方にまたがる衣浦湾は、尾張と三河の両方で生産した荷物を廻船に混載する。船荷物は、知多・三河の醸造品をはじめ木綿、瓦、油などであった。これらを積む廻船の主力は、18世紀段階では三河差配の船（奥建廻船）であったが、19世紀中頃より尾州廻船の亀崎船に変わっていった。このような廻船は奥立廻船とよばれた。

尾張藩は国産品の産業統制とともに、流通（廻船）統制を行おうとしたが、三河荷物との混載問題が解決できず、断念する。このことが、上記で述べた、知多の産業従事者が三河との関係を重視し、尾張藩との距離を置くことにつながる。

(5)　尾張藩は、知多半島を産業の発達した地域であると考えており、特定の業種の商人に限定せず、村に割りかける御用金を賦課した。知多半島の村のなかでも、産業が発達した村とそうではない村があり、村落間格差は激しくなった。そのため、産業が発達した村への従属化が進んだ。天保期から幕末期にかけて、村を超えた地域社会の変容がみられる。ただし、産業が発達した村と周辺村との関係は、単に経済的従属関係のみで捉えるのではなく、雇用労働として産業を支える側面もある。

半田村の北側、亀崎村の西側に位置する阿久比地域は、かつて酒造地帯であったが、酒米の米搗人足の供給地として成立した。また、下半田村の醸造家である中野又左衛門家の奉公人の出身地を分析すると、80%以上が、三河出身である。

(6)　尾州廻船研究は、内海船だけでなく、

多様に存在する廻船の実態が明らかにされてきた。ただし、伊勢湾と江戸をつなぐ廻船だけが、酒造業にかかわってきたわけではない。

日本を代表する酒造地帯は灘・西宮であり、桶・樽・酒袋などの酒造道具は、知多半島の酒造家も上方から移入していた。半田や亀崎の船は、江戸行であったため、上方に行くことはなく、酒造道具を得るためには、上方行の廻船が必要になる。そこに内海船といった関東と瀬戸内海をつなぐ廻船の存在が重要となる。内海船は米・塩などの買積を得意としたが、知多の酒造業を支える廻船として、運賃積で酒造道具を輸送した。

(8) 産業と金融との関係は、江戸で販売した酒・木綿などの代金で、領主の江戸下し金と相殺される事例が数多くみられる。尾張藩、津藩、紀州藩などでは、藩の仕組みに為替が位置付いている。

紀州藩では、享保期から大名為替を行っていることが確認できる。尾張藩では、先に述べた御払居米の先納金を江戸で販売した酒代金と相殺する為替システムが、文化期に生まれた。さらに、文政期になると、御蔵酒制度を導入し、酒造米に税をかけ、それを江戸での酒販売代金から江戸で上納するシステムへと移行した。

三河の領主は、中小の大名や旗本が多く、年貢をすばやく貨幣に代え、江戸に送金できる為替は必要なシステムであった。領主にとっては、先納金を商人に要求することもあり、産業と結びつく金融の存在は重要である。さらに、三河の年貢米が知多酒の原料米となり、産業・金融の関係性はより複雑化する。

(7) 産業による富の蓄積が、どのように生産地の消費とつながるのかを明らかにした。村の町場化の問題である。先に述べたように、産業中心の村が労働力や経済力など周辺村に対しての求心力が高まる。

湯屋の開設は、村というより、町に近い発想である。湯銭の設定は名古屋での価格を参考にする意見も出されている。

また、商人宿も多くみられるようになる。

半田村で３軒、亀崎村でも複数の商人宿が確認できる。半田村の三枡屋という商人宿には、大丸屋（呉服店）が常泊して、おそらく御用聞（外商）として、地域の富裕層を回っていたものと思われる。大丸屋に対し、半田村は村益と称して役米を納めさせている。

亀崎村では、商人宿を拠点にした大掛かりな詐欺事件が起こった。櫛・笄などの鼈甲研磨職人が亀崎村の商人宿に泊まり、村人たち鼈甲類を集め、そのまま持ち逃げした事件である。このような詐欺行為が成り立つのは、多くの人々が集住し、ある程度の経済力を持っていたからである。そこに町場の要素がある。都市の消費が地方に広がり、村を町場化させていった。

これまでの在郷町研究では、地方の町については、交通も要所である宿場町や門前市による町などが指摘されているが、産業の展開による町場については、あまり言及がされておらず、地域社会の変容のひとつの事例として、産業の展開と村の町場化の問題を掲げておきたい。

知多半島と三河を考える消費の問題として、海産物流通および肥料流通が重要である。海産物は、亀崎に魚市場があり、三河内陸部に、魚の小商いの販売ルートがあり、行商人が往来した。また、肥料流通では、半田村の頭百姓である小栗三郎兵衛家の肥料販売先のほとんどが三河である。三河は 18 世紀後半からの木棉栽培・19 世紀初頭の新田開発の展開によって、肥料需要が見込める地域であった。

半田が江戸積廻船が往来する場所であり、小栗家は酒造家から肥料商・味噌商に転進した。当時の肥料は干鰯・〆粕であり、関東・東北産のものが多く、江戸積船の帰り荷物として、多く積まれた。このような流通上の効率性もあり、肥料商が展開し、三河での需要を支える仕組みとなった。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

①曲田浩和「碧海郡川島村太田佐兵衛の為替取組の実態」『安城市史研究』第 10 号 33p-54p　20098 年　査読無

②曲田浩和「尾張国知多郡下半田村の頭百姓制にみる村社会の一端」『知多半島の歴史と現在』№14　2007 年　161p-191p　査読無

③曲田浩和「伊勢湾周辺地域における木綿流通と知多木綿」『知多半島の歴史と現在』№13　125p－143p　2006 年　査読無

〔学会発表〕（計１件）

①曲田浩和「近世中後期における産業・流通の展開と伊勢湾地域」（2009 年歴史学研究会近世史部会大会報告）中央大学

研究組織

(1)研究代表者

曲田　浩和(MAGARIDA　HIROKAZU)
日本福祉大学・経済学部・准教授
研究者番号：００３２９７６５